

(様式6)

平成28年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における  
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」  
委託業務報告書【推進地域】

番号	23	都道府県市名	愛知県
----	----	--------	-----

### 1 推進地域における学力に関する現状

本県には、さまざまな理由により、基礎・基本の定着が十分でないまま入学してくる生徒を多数抱える高等学校があり、それらの学校では、第1学年において中途退学する生徒や進路変更をする生徒が少なくない。また、不登校等の理由から中学校の学習において既に課題を抱えて入学してくる生徒も多い。それらの生徒に対し、義務教育段階での基礎・基本の一層の定着を図り高等学校での学習を円滑に進めるためには、既習事項の学び直しを図りつつ社会で役立つ思考力・判断力・表現力の育成を図る指導の工夫や、地域と連携した体験活動の充実及び学習意欲を喚起し自己有用感を高めるためのキャリア教育の充実等の研究が求められている。

### 2 研究課題（平成28年度の重点課題）

#### (1) 地域と高等学校及び高等学校間の連携の推進

##### ア 中高連携及び高等学校間連携による効果的な指導の研究

(ア) 推進校と同様の課題をもっている県内の高等学校の教職員を推進校の発表会等に参加させ、授業改善に取り組ませることで各校の学習指導に対する指導力を向上させる。

(イ) 高等学校と近隣中学校との相互の授業参観や研究協議を通じて、高等学校及び中学校における生徒の実態と学習指導について共通理解を図り、生徒の実態に即した指導方法について研究する。

(ウ) 推進校における中学校の教諭及び学校評議委員などを対象とした公開授業及び研究協議を推進する。

##### イ 地域との効果的な連携のあり方の研究

地域との連携を図り、就業体験の機会を積極的に設けるなど学校の教育活動全体を通じた系統的かつ計画的なキャリア教育に取り組み、望ましい勤労観、職業観を身に付けさせるとともに、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な能力や態度を育成する。

#### (2) 生徒を対象としたアンケートの実施と授業モデルの開発

ア 推進校において、生徒を対象としたキャリア教育に関するアンケート（育成を目指す力を踏まえ独自に作成したもの）を実施し、生徒の諸能力、学習意欲や進路意識の変化等を検証する。

イ 推進校において、年2回の授業評価を行い、教員の意識及び指導内容の妥当性等について検証し、各科目の授業改善に活用させ、課題解決に向けた主体的・協働的な学びを推進させる。

### 3 研究の内容

本事業において、効果的な中高連携及び高大連携、体験的学習を通じた学習意欲の向上、社会貢献活動を通じての自己有用感の向上、地域社会との連携による教育活動の充実などに取り組んだ。

#### (1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

本研究を推進するに当たって、企画・運営及び分析・評価をするために、次の研究体制を組織した。

ア 研究支援委員会

校内の研究委員に外部委員及び教育委員会指導主事等を加えた委員会を組織し、研究の進め方等についての検証及び指導・助言を行った。

イ 学力向上推進協議会

地域の小中高等学校関係者、大学関係者、保護者、地域住民及び地元企業の代表で構成し、研究の実施のための指導、助言、支援及び研究成果の検証等を行った。

また、学校評議員に研究の進捗状況等を報告し、評価を受けた。

(2) 推進校への具体的な支援・指導

ア 他の県立高等学校における取組状況の把握と情報提供

平成26年度から27年度と同研究指定校であった県立加茂丘高等学校及び平成25年度から27年度の高等学校における「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」の成果の継承と活用を促した。また、平成28年度からの県の取組である「教育課題研究指定校事業」の研究指定校との情報交換等連携の推進を図った。

イ 研究支援委員会における指導・助言

推進校の要請に合わせ高校教育課指導主事、総合教育センター研究指導主事、大学教授等が連携体制を構築した上で研究を支援した。

ウ 研究成果の他校への普及・還元

研究発表会を全県立高等学校に周知し、参加を促した。

#### 4 研究の成果、作成した成果物

(1) 地域と高等学校及び高等学校間の連携の推進

推進校における公開授業及び研究協議を実施することができた。2月に実施した中間発表会には、推進校と同様の課題をもつ県内の高等学校の教員が参加し、各高等学校の学習指導に対する指導力の向上の機会とすることができた。

また、昨年度まで実践校として本研究を進めてきた高等学校の教員を推進校の研究支援委員に加えることにより、高等学校の教員相互の連携を深めることができた。

(2) シチズンシップの向上

家庭クラブ、調理国際科及び生活デザイン科を中心に、地域との連携を図り、学校の教育活動全体を通じた系統的かつ計画的なシチズンシップの向上を推進することができた。

(3) 生徒を対象としたアンケートの実施と授業モデルの開発

推進校において年2回の授業評価を行い、教員の意識及び指導内容の妥当性等について検証し、各科目の授業改善に活用させ、課題解決に向けた主体的・協働的な学びを推進することができた。また、推進校において、国語・数学・外国語（英語）を中心に授業改善と授業モデルの開発を支援し、生徒の主体的な学びを促すことができた。

#### 5 課題とその分析

(1) 推進校における授業改善の取組が各教科（国語・数学・外国語（英語））の取組にとどまっており、学校全体の取組に高められていない。個々の教科の実践ではなく、学校全体としての実践とするため、学力向上委員会を活性化し、共通の目標の下で授業実践を取り入れていく必要がある。

(2) シチズンシップ向上の取組が家庭クラブ、調理国際科及び生活デザイン科それぞれの取組にとどまっており、学校全体の取組に高められていない。地域連携アドバイザーと連携して生徒の自己有用感を高める取組を実践し、学校としてのねらいをもって系統的かつ計画的なキャリア

ア教育に取り組む必要がある。

## 6 推進地域における研究成果等の今後の活用

### (1) 推進校の取組

推進校は、保護者や地域の学校関係者を対象に授業公開を行ったり、ホームページに研究成果を公表したりすることにより成果の普及・還元に努める。

研究発表会を開催し、県内の高等学校及び地域の中学校に、取組の内容及びその成果を発表し、普及・還元を図る。

実践についての報告書を作成し、全県立高等学校に配布する。

### (2) 推進地域の取組

#### ア 研究支援委員会における指導・助言

推進校及び地域の児童・生徒の学力の実態についての共通理解を図るとともに、地域の学力向上に向けた取組について協議する。

#### イ 教員研修会での発表及び学校訪問における指導・助言

本研究成果を管理職・教務主任等を対象とした研修や教育課程に関わる研究会において発表したり、学校訪問における指導・助言の参考資料としたりする。

### (3) 普通科における魅力ある学校づくりのための基礎資料

本県においては高等学校教育改革の一貫として普通科高等学校における魅力ある学校づくりを進めている。今後、地域の実情を踏まえ、生徒の多様な興味・関心に応える教育課程の弾力化やコースの改廃・新設を推進するために、本研究の成果を基礎資料とする。

## 7 その他

なし

(様式 7)

平成 28 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における  
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」  
委託業務報告書【推進校（学校）】

都道府県市名	愛知県	学校名	愛知県立岩津高等学校
--------	-----	-----	------------

1 推進校における学力に関する現状、生徒の実態

(1) 歴史

愛知県立岩津高等学校は昭和 10 年(1935 年)に農商学校として開校し、平成 27 年には創立 80 周年を迎えた伝統校である。昭和 37 年の入学生からは家政科女子のみの募集となり、その後、昭和 61 年に普通科 3 クラス、食物調理科(現在は調理国際科) 1 クラス、生活デザイン科 2 クラスの 3 学科併設の男女共学校となった。

(2) 立地

名鉄東岡崎駅から北へ車で 20 分ほどの岡崎市郊外に立地し、豊田市に隣接するため、生徒の大半は両市から自転車で通学している。本校の北隣には小学校、正門前の道路をはさんで中学校がある。県立岡崎聾学校も徒歩 10 分と近い。

(3) 生徒の実態

女子校時代は部活動が盛んで、県大会上位や全国大会で活躍する選手がいたが、男女共学となり、平成を迎えたころから中学校時代の不登校、集団生活に適應できない、家庭で落ち着かないなどの各要因が複雑に絡み、生徒指導上の課題を抱えた生徒が多く入学するようになった。遅刻 60 名、欠席 30 名、早退 15 名が 1 日の平均であり、特別な指導を行わなければならない生徒も増え、一時期は地域からの期待に十分応えることができない状況があった。

組織的な生徒指導に力を注いだ結果、現在は落ち着きのある学校の雰囲気を取り戻している。

(4) 学力

調理国際科は、公立高校としては全県唯一の調理師養成課程を有することから、目的意識も高く、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。しかし、普通科と生活デザイン科は、岡崎・豊田市の通学範囲内から学力の低い生徒が集まり、将来の目標が曖昧で、学習に対する意欲も低い状況である。

入学生の学力や生徒指導面を考慮し、1 年生のみであるが、普通科 3 クラスの募集を 4 クラスの少人数クラスとしている。同様に、生活デザイン科は 2 クラスの募集であるが、3 クラス展開としている。なお、各学年普通科に進学クラスを 1 クラス設けている。

(5) 進路

普通科の進学コースは約 75%が進学をする。3 学科を平均すると進学者は約 50%であり、そのうち専門学校及び短大の割合が約 70%を占める。国公立 4 年制大学への進学者は少なく、過去 3 年間で 5 名(過年度 1 名を含む)である。

2 研究課題(平成 28 年度の重点課題)

- (1) スモールステップの取組による義務教育段階の学び直しや基礎的な知識・スキルの定着、思考力・判断力・表現力の育成及び「主体的に学ぶ力」の向上
- (2) シチズンシップの形成のための公共心、道徳心の育成
- (3) キャリア教育の充実

### 3 研究の具体的内容

#### (1) 実施体制（学力向上推進協議会の位置付けを含む）

##### ア 研究支援委員

研究の方向性を確立するため、大学教授、前年度までの研究校（県立加茂丘高等学校）の職員、愛知県教育委員会指導主事に委員を依頼した。

##### イ 授業支援委員

国語、数学、外国語（英語）の3教科に教科別の授業支援員1名を置いた。県内の大学教授等に依頼し、研究の主体となる教員が直接アドバイスを得られる体制を整えた。

##### ウ 地域連携組織

地区内にある地域交流センター「なごみん」と、NPO 法人岡崎まち育てセンターの職員を組織に加え、生徒が校外で活躍する機会を増やすための協力体制を整えた。

##### エ 校内研究委員

###### (ア) 学力向上推進委員

教務主任及び国語・数学・外国語（英語）の代表者各1名

###### (イ) シチズンシップ・キャリア教育推進委員

総務部、生徒指導部、進路指導部、生活デザイン科、調理国際科、家庭クラブの代表者各1名

#### (2) 推進地域（教育委員会等）との連携

地域性を活かし、隣接する小・中・特別支援学校との異校種交流や、地域施設との連携を充実させた。

#### (3) 学力向上に向けた具体的な取組

##### ア 職員の取組

###### (ア) 校内研修の実施

平成28年8月23日（火）及び25日（木）に、南山大学教授石田裕久氏による協同学習についての講義とグループワークを行った。また、平成28年10月13日（木）には愛知県立加茂丘高等学校鈴木和浩教諭による第2回目の校内研修を行った。「協同学習」を導入することで授業改善を行うこととした。

###### (イ) 研究先進校の視察

###### ① 県外視察

広島県立安西高等学校 岡山県立和気閑谷高等学校 岡山県立邑久高等学校  
滋賀県立草津高等学校 静岡県立御殿場高等学校 広島県立安芸南高等学校

###### ② 県内視察

愛知教育大学附属岡崎中学校 愛知県立天白高等学校 愛知県立犬山南高等学校  
愛知県立加茂丘高等学校

##### イ 各教科における授業方法の改善

#### (4) 検証の手立て

##### ア 「授業評価シート」を利用した生徒アンケートの実施

7月と12月に実施し、生徒の変容の把握等研究成果の検証を行った。

##### イ 外部研究支援委員会による進行管理と助言

9月と11月に公開授業を実施し、授業支援委員会を開催した。2月には中間発表会を開催し、県内高等学校及び近隣中学校等の参加者から感想と助言を得た。

## 4 研究の成果、生徒の変容

### (1) 授業方法の改善

国語・数学・外国語（英語）の学力向上推進委員会を中心にして、ペアワークやグループ学習による協同的な学習の導入、発表機会を増やし表現力を身につけさせるための指導と評価方法の工夫改善を行った。

#### ア 国語

「主体的に学びあう喜びを感じる授業～身につけさせる力を明確にした教材研究及び指導法の工夫～」

（成果）文中の表現をしっかりと見つめようとする姿勢ができ、協働的な活動に積極的に取り組もうとする姿が見られた。

#### イ 数学

「生徒自身による問題作成と解説～協同学習を通じた能動的な授業参加～」

（成果）能動的に授業に参加し、試行錯誤して問題を作成する中で、単に問題を解くだけでは分からない問題の構造や仕組みを知るおもしろさに気づくことができるようになった。

#### ウ 外国語（英語）

「間違えることを恐れず英語を活用するための授業実践から～No more Landmines!ポスターで地雷撲滅運動～」

（成果）題材に主体的・協働的に向き合うことにより、自分の問題としてとらえることができるようになった。Speaking 活動に対する抵抗感が減少し、他人の意見に対し興味を覚える生徒が増加した。

### (2) 生徒に活躍の機会を与える授業の実施

生活デザイン科は、日本デザイン文化協会主催の「NDK Fresh Contest 2016」に応募、作品制作部門の応募総数は 522 点、デザイン画部門には 163 点の中から、作品制作部門（高校生の部）優秀賞 1 名、デザイン画部門（高校生の部）入選 3 名の結果を得た。

調理国際科では、西尾市商工観光課主催の「第 3 回高校生パティシエによる抹茶スイーツ選手権」に応募、東海・北陸・近畿の 2 府 11 県から 128 校の中から、最終審査の 5 校に残り入賞することができた。その他にも、多数のコンテストに挑戦し受賞している。

（生徒の感想）アイデアが思い浮かぶたびに自分の成長を感じた。作ることも考えたデザインをする力が身についた。外部の人に見てもらい結果が帰ってくるのを待つのは緊張感があった。

### (3) 校外での発表

本校の専門学科の特色を生かし、学んだ知識・技能を対外的な場で発揮できる機会を設けた。岡崎市内の小中学生が家庭科や技術・家庭科の授業で制作した各校の優秀作品を展示している会場の一角を借り、調理国際科と生活デザイン科の学科を紹介するブース出店を行った。小中学生やその家族が訪れる場で、調理国際科は包丁さばきの実演や調理に関するクイズコーナーを設け、生活デザイン科はプラパン作りと授業で作成した作品展示を行った。

### (4) 地域連携

#### ア 「こどものまち なごみん横丁」

地域交流センターが主催する行事に、生徒会を中心とした 22 名の生徒がボランティアスタッフとして参加した。子どもたちのみで仮想の街を運営するイベントで、主に小学生の活動の見守り活動に取り組んだ。事前打ち合わせや会場準備などについて交流センターの職員と打合せを行い、当日の運営に携わった。

（生徒の感想）間近で小学生の活動を見る機会は貴重でした。機会があればまた参加したい

し、もっと多くの人にこのような取組を知ってもらいたいと思った。

#### イ 五校交流会

近隣にある異校種の学校（小学校、中学校、特別支援学校）と交流を行うことで、生徒が様々な体験を共有する場を設けた。生徒会や家庭クラブが中心となって、地域の交流館で缶バッジ、スイーツデコづくり、ゲームによる交流会等を実施した。

### 5 課題とその分析

#### (1) 3教科から全教科への発展

本年度の研究は、教科では国語・数学・外国語（英語）の3教科、学科では調理国際科と生活デザイン科を中心に取り組んだ。3教科の研究では、大学教授等の研究者からの助言を受け、研究授業を積極的に行い授業改善に取り組むことができた。しかし、他の教科においては県内外の視察を行ったものの、授業改善に十分に生かすことができなかった。そこで次年度は、各教科全般に協同学習の広がりを持たせるために校内組織の機能をさらに高めることが課題と考える。

#### (2) 生徒主体の活動に

生徒による授業アンケートの項目に、「5 自分で考えたり、グループで取り組んだり発表したりする機会がありますか」と、「6 興味・関心を持ち、積極的に授業に取り組んでいますか」の2項目を追加し実施した。国語、数学・外国語（英語）で、研究の中心となる教員が協同的な学習に取り組み始めたことから、第2学期は項目5において数値の上昇が見られた。しかし、項目6からは、生徒の興味・関心に課題があることが分かった。そこで今後は、教員の取組が生徒の意識に反映されるよう、学習内容や指導と評価方法を工夫する必要があると考える。

また、調理国際科と生活デザイン科を中心とした取組では、コンテストへの応募や地域のボランティア活動など、対外的な活動機会を増やすことができた。今後は生徒主体で考えた活動に発展させ、一人一人が主役となり自己有用感と達成感を味わえるような取組に結び付けていくことが課題と考える。

### 6 今後の取組（予定）

#### (1) 研究組織の確立

ア 年間を通じた校内研修計画の立案

イ 教科会の活性化による職員の研究意識の醸成

#### (2) 研究の広報活動

#### (3) 研究先進校との連携による全教科における授業改善の推進

### 7 その他

なし